

日本語教育における肯定評価表現

大野敬代
(早稲田大学)

本発表では、日本語教育で扱われる「肯定評価表現」と、日本語の実態に近づけるための指導の提案をすることを目的とする。

「肯定評価表現」を、相手自身、あるいは相手に関連する、「よい」と認めうるものごとについて、明示的あるいは暗示的に肯定評価を与えることによって、相手への好感情をあらわす言語行動、とすると、「肯定評価表現」は、目上から目下に向けられる場合に限らず、同等の者や目上に対しても意図し、行われるものである。ただし、評価という性質からも目上に対する場合には、表現方法や使用することばに注意し、使い分けるべき待遇表現としての性質を有する。

この「肯定評価表現」についてまず、日本語の教科書でどのように扱われているのかという点とともに、日本語学習者の使用の仕方を調査する。初級や中級の教科書のうち、コミュニケーションを重視しているものであっても、ほめなどの「肯定評価表現」はとりたてて扱われることが少ない上に、不自然と感じられる例もある。実際、学習者のほめの使用の中には不適切なものがあり、特に、教科書ではほとんど紹介されていない、目上の行動や家族をほめる場合に目立っていた。

そこで、何がどのように不自然、不適切なのかという点を明らかにするために、日本語のコミュニケーションでの実態と比較したところ、目上に対する表現方法（お礼や表現主体自身の感情表現とすべきところを評価語を使っていた）や評価に用いる評価語（先生に「えらい」などを使用していた）に問題があることがわかった。本発表では結論として、ほめなどの「肯定評価表現」の指導で注意すべき点などをまとめることにする。

なお、実態の分析には、テレビドラマの脚本や映画のシナリオ約 100 本を用いた。シナリオの数を増やすことによって作家の個別の特徴が薄まり、教育のみならず、日本語の調査にも有効であることも指摘したい。